

週刊

夢の窓

No.12



むうにい

忘れ物を取りに行かされる

嫌いな雰囲気目覚めた。この感じ、どこか覚えがある。なんだったっけかなあ。
ベッドの中でしばらく考えているうち、だんだんと思い出してきた。もしや、と枕もとの目覚ましを見れば、もう9時をとくに回っている。
「あっ、しまった。学校、完全に遅刻だっ！」
わたしは転げるようにベッドを飛び下り、大慌てで着替えを済ます。全速力で、中学校まで走った。

しんと静まり返った廊下を忍び足で進み、教室の後ろの戸をそっと開ける……。
「こらあっ、むうにいっ！」たちまち、ガンタの罵声が飛んで来た。
「す、すいません。遅刻しましたっ」わたしは縮み上がる。
「そんなこたあわかってるっ。まったく、お前という奴は。なんでこう、いつもいつも、いつもいつも、遅刻ばかりしてるんだあっ！」
「ガンタ」というのは、担任の岩田幸子先生だ。先月、結婚したばかりで、今頃は旦那さんと甘〜い生活を送っているはずなのに、かえって「男らしさ」に磨きがかかる。
それにしても、そんな繰り返し言われるほど、わたしは遅刻をしてたかなあ。

「目覚まし時計が調子悪かったみたいで、寝過ごしてしまいました」一応、言い訳を試みる。
「中学ぐらいにもなれば、目覚ましなんぞに頼らなくても、ぱっと起きろ、ぱっと」やっぱり、通用しなかった。
「はい、以後、気をつけます」わたしはべこりと頭を下げる。

席に着こうとしたが、わたしの机はどこにもなかった。後ろから3番目、窓際から2列目だけ、ぽっかりと空いたままだ。
ああ、またガンタに怒られちゃう。
「先生、あのう」おずおずと申し出る。
振り返ったガンタの眉間には、深い縦縞が刻まれていた。
「なんだっ？」
「えっと、その。机を家に忘れてきてしまいました……」やっとのことで絞り出す。
「ばっかもんっ！」朝から2度目の雷が落ちた。「遅刻をした上に、忘れ物だと？」 さっさと、取りに行行って来いっ！」

弾かれたように、わたしは教室を飛び出した。家路を駆けながら、（あーあ、よりによって、一番大事なものを置いてきてしまうとは）と自分を呪う。

途中、机を頭に載せた母と出っ食わす。
「あらあら、今、あんたの机を届けに行こうとしてたのよ」頭上でバランスを取りながら母が言った。
「あ〜、助かるっ。ガンタ、じゃなかった。岩田先生に、思いっきり怒られちゃった」
わたしは母から机を受け取ると、自分の頭の上に、どっこいしょと載せる。
「今日の夕食は酢豚にするから」母は手を振って、引き返していく。
「うん、パイナップルもちゃんと入れてね」わたしも、急いで学校へと向かう。

頭の上ではスチール製の勉強机がぐらぐらと揺れている。そのたびに、引き出しに入ったままの教科書やノートが飛び出しそうになった。
時々立ち止まっては、それらを奥へと押し込み、また歩きだす。

それにしても、毎朝の通学は大変だ。大人達は、「中学生っていいよな。気楽に学校へ通って、1日をのんきに過ごすだけで済むんだから」などと言うけれど。

チョコレート工場・前編

ポストに求人募集のチラシが入っていた。

〔急募！ 誰にでもできる、簡単な作業です。日当、20,000円！ 応募資格は、とにかくチョコレートが好きの方。チョコレートのためなら、たとえドラゴンを相手にすることもいとわない、そんな人材を求めます！ 介川製菓株式会社〕

ドラゴンとはまた、大げさな。つまり、それだけ製品にこだわりがあるということなのだろう。ちょうど暇を持って余していたし、チョコレート好きということに関しては、間違いなく自信がある。何より、日当、20,000円というのは魅力だった。さっそく、面接に行ってみる。

応接室で面談をするのは、工場長その人だ。もじゃもじゃの白髪に、でっぷりとした体格。どこか、サンタクロースを思わせる。「1つだけ、聞かせて下さい」工場長は口を開いた。「あなたは、ごはんにチョコレートを掛けて食べるのが好きですか？」普通の人なら、「はあ？」と聞き返すところだろう。けれど、わたしは違った。「はい、よくやります」工場長はにっこりとうなずく。「今日からでも、来られますか？」

さっそく、工場へと案内される。「わたしたちの作るチョコレートは、原材料のカカオからして、よそとは違うのです」工場長は道々、そう説明してくれた。世界広といえども、その「とびっきり」のカカオを使っているのは、ここだけだと言う。「いったい、どこの国から輸入しているんですか？」わたしは尋ねた。「そこへこれから案内しようと思います」プラントの突き当たりに、エレベーターが見えてきた。乗り込むと、工場長はベルトから下げた鍵束を取り出し、「工場長専用」と書かれた鍵穴に差し込む。

エレベーターは、地下深くへと降りて行った。どこまでも、どこまでも。いい加減、地の底じゃないだろうか心配しかけた頃、工場長が言った。「そろそろ着きますよ」時間にして20分くらいだろうか？ 数千メートルは潜ったに違いない。扉が開くと同時に、甘くほろ苦い香りが広がった。乗った所はプラントの一画だったが、ここはまるで、ホテルのロビーのようだ。

「さ、外に出てみましょう」工場長は、先に立って歩き始めた。わたしはその後をついて行く。回転ドアを抜けて、わたしは目を丸くした。美しい町が、そこに広がっていたのだ。「ようこそ、スイートランドへ」と工場長。

「これって、テーマ・パークか何かですか？」ばかみたいに突っ立ったまま、わたしは質問をする。「いやいや、れっきとした独立国ですよ。国連にもちゃんと加盟してます」「へー、日本の地下に他の国があるなんて、ちっとも知りませんでした」

夕暮れそっくりな光に照らされ、どこか中東を思わせる、チョコレート色の建物が並ぶ。「ごらんなさい、すべてチョコレートで出来ているのですよ。家も、草木も、そして住人達までも」「えっ、住んでる人もですか？」わたしはまた、びっくりしてしまった。「そう、文字通り、何もかも、です」

よく見れば、行き交う人々もみんなチョコレート色の光沢を放っている。口の中に唾が湧いてきた。

「この国のカカオは、他とは比べものにならないほど、良質のものでしてね。おかげで、我が社のチョコレートは、常に世界シェアNo. 1を誇ってきました」工場長と並んで町を散策する。「ところが、ここへ来て、ちょっとばかり問題が起こりまして……」「問題ですか？」わたしは聞き返した。「ええ、肝心のカカオが手に入らなくなるかも知れないのですよ」「それは大変ですね。でも、どうしてまた？」

「実は、カカオが採れる唯一の湖・カカオノ湖水に――」工場長がそこまで言い掛けたとき、突如として、上空を黒い大きな影が覆った。

「甘党ドラゴンがやってきたぞーっ！」人々は叫び声を上げながら、逃げ惑った。熱した鉄のように真っ赤なドラゴンが、辺り構わず火を吐き、家や樹木を喰らう。

わたしは察した。

「問題というのはつまり、あいつのことですねっ？」

「うむ、その通り。奴め、カカオノ湖水に居座るだけでは物足りず、とうとう町を襲いだしおったわいっ！」

〔急募、日当20,000円。ドラゴン相手にもいとわない方求む〕

なるほど、そういうことか。世の中には甘い話などない。いや、チョコレートだけに、これ以上ないほど甘い仕事と言えよう。

なんにしても、割のいい仕事ではなさそうだ。さりとて、今さら引き下がるのもしゃくである。さて、どうしたものか。妙案はあるのだろうか？

(後編に続く！)

チョコレート工場・後編

甘党ドラゴンは町に降り立ち、手当たり次第に嚙りついていく。電柱、街路樹、しまいには道路に敷き詰められたレンガまで剥がして、ガツガツと食べ始める。
「ああ、ゴミ収集車ごとががついてる。汚いなあ、あんなもの食べて」わたしは思わず顔をしかめた。
「まあ、どれもチョコレートで出来てるのですが。何しろ、『甘党』ですからねえ、チョコレートには目がないわけですか」工場長は言った。

住人や動物たちもチョコレート製なのに、彼らには見向きもしない。本能的に、おいしくないとわかっているのだろうか。
「この国には軍隊とかないんですか？」やきもきしながら、わたしは聞いた。このままでは、国が滅んでしまう。
「軍隊も兵器もありませんが、唯一、望みがあります」
「なんですか、それは？」
「とにかく、宮殿へ急ぎましょう。わたしは国王と話さなくてはなりません」

宮殿では、国王と大臣達が頭を寄せ合っていた。わたしたちに気づいた国王は、足早にやって来る。
「これはこれは、工場長殿。わしら、万策尽き、どうしてよいか、もうわからんのですじゃ」
「国王、封印を解かなくてはなりませんよ」工場長がきっぱりと提言する。
「なんと、沼の封印をかの？」
「その通り。今すぐにです！」
「しかし……」国王は煮え切らない。何か、相当にヤバイものなのか？

「すっかり封印が解けるまでには3日掛かります。その間に、この者をカカオ山へ向かわせましょう。例の物を取りに行かせるのです。それ以外に方法はありません」
工場長はわたしの肩をぽんっと叩いた。
「どうやら、これが求人内容だったらしい。
「よくわかりませんが、やります。チョコレートのためにも、この国のためにもっ」わたしは力強く、決意を示した。

わたしは、会議に加わり、改めて任務を伝えられる。
「ここから1日半ほど歩いた先に、カカオ山という休火山があるのですが」工場長は、広げられた地図を指でなぞる。「てっぺんに耐熱カカオの木が1本ありましてね。その実を持ってきてもらいたいです」
「なあんだ、簡単ですね。それで、あのドラゴンを退治できるわけですか？」
「まあ、そうじゃ」国王が答える。「できるものなら、わしらが行きたいところなんじゃが、そうもいなくてのう」

工場長が代わりに説明をする。
「休火山とは言え、周辺は相当に熱いのですよ。チョコレート人間達では、近づいただけでドロドロに解けてしまうでしょう。それに、所々でチョコレートの蒸気が吹き出していますね。よほどのチョコレート好きでもない限り、とてもじゃありませんが、先へは行けません」
「それなら、工場長お1人でも間に合ったんじゃないありませんか？」わたしが首を傾げると、
「いやあ、お恥ずかしい。作るのは大好きなのですが、1口なめただけでもゲツとなってしまいうほどです」

きっかり1日半掛けて、わたしはカカオ山の麓までやって来た。
ごつごつとしたカカオマスの塊を乗り越え、さらに進んでいく。
いたるところに岩砂糖が転がっていて、あちこちで混ざり合い、チョコレート溜まりを作っていた。うっかりと足がはまってしまい、そのたびに服や体にチョコレートが染みていく。

山頂に近づくにつれ、だんだんと蒸し暑くなってきた。傾斜もきつく、足を運ぶのもつらい。ところどころに空いた裂け目からは、間欠泉のようにチョコレートの蒸気が吹き上がった。
1度など、蒸気をまともに食らってしまい、熱と香りに思わず、むせ返る。
「ゴホッゴホッ。いくらチョコレートが好きと言っても、確かにこれは……」

やっとの思いで頂上へとたどり着いた。工場長が話してくれた通り、1本のカカオの木が立っている。手前の小さな立て看板には、こう記してあった。

〔お口に溶けて、火に溶けない！ 世界にただ1本の「耐熱カカオ」〕

「ついに見つけた！」わたしはカカオの木を揺すって、実を1つ落とすと、それを抱え、元来た道を急ぐ。

宮殿に着いたのは、ちょうど3日目の終わりだった。

「おおっ、伝説の耐熱カカオを取ってきてくれましたね！」工場長がほっとした顔で出迎えてくれる。「ささ、早く沼へっ」国王が、わたし達を宮殿の裏庭へと案内した。「封印がじきに解ける頃じゃ。そら、その耐熱カカオを沼に放り投げてくれんか」

チョコレートの沼に、わたしはおそろおそろ耐熱カカオを沈めた。

沸騰した湯のように、ボコボコと泡立ち始める。

「離れなくて大丈夫ですか？」後ずさりしながら、わたしは国王と工場長の顔をうかがった。

「そうじゃのう、ちいっとばかり離れておこうか」2人も、わたしの言葉に従う。

次の瞬間、チョコレートを勢いよく撥ね上げながら、何か大きなものが飛び出してきた。

「出たぞっ、わしらスイートランドの守護龍・チョコレート・ドラゴンじゃっ！」チョコレートのしぶきをざぶざぶと浴びながら、国王は歓声を上げる。

「いいえ、国王。チョコレート・ドラゴン改、耐熱仕様です」工場長は付け加えた。

神に匹敵する強さを持ちながら、チョコレートなので熱に弱いという、唯一の弱点を克服したドラゴン。我が物顔で暴れ回る赤いドラゴンに向かって、一直線に飛んで行く。

「わたしたちの役目は終わりました。工場に戻って、生産の遅れを取り戻すとしましょう」工場長は言った。

甘党ドラゴンの断末魔を背中に聞きながら、わたしたちは地上へと向かうエレベーターに乗り込む。

「大広場に、あなたのチョコレート像を建てるそうですよ」工場長が教えてくれた。

「ほんとですか？　うれしいなあ」なんだか照れてしまう。「別に、大したこともしてないんですが」「いやいや、あなたはこの国を救ったのです。もしも、求人に応じてくれていなかったら……。考えただけでも、ゾッとしますよ」

「上に戻ったら、今度こそチョコレート作りを教えてもらえますか？」わたしは聞いた。

「もちろんですともっ。秘伝の調合、温度管理、テンパリング、全て覚えてもらいますからねっ！」

「それにしても、驚きました」わたしはくすっ、と思出し笑いをする。

「はい？　何がでしょう」

「まさか、工場長がチョコレート嫌いだったなんて」

喫煙を始めた友人

待ち合わせの喫茶店に入ると、もう木田仁が待っていた。

「あーん、ごめんね。ちょっと遅くなっちゃった」わたしは向かいに掛ける。

「おいらもさ、今来たばっか。あ、ちょっといいかな、1本？」木田は胸ポケットからゴールデン・バットを取り出した。

「えー、タバコなんて吸い始めたんだ」わたしは驚いた。

「うん、吸ってみたら中々うまくてさ。今、色々な銘柄を手当たり次第に試してるとこなんだ」

ぎこちない手つきで火をつけると、プハァーっと煙を吐いてみせる。

ゴールデン・バットを吸い終わると、アイス・コーヒーを飲むのに使っていたストローに火をつけた。

「ちょ、ちょっと、木田。それ、ストローだよっ！」慌てて止める。

「ああ、いいんだ。おいらさあ、色んな銘柄を試してるって言ったろ？」

「それも銘柄のうちなんだ……」

ストローに雫でも残っていたのか、ほのかにコーヒーの香りがした。

「この、すっかさかな感じがたまらないなあ。ああ、うまい、うまい」

本当にタバコの味がわかっているのかなあ。

喫茶店を出た後も、道々、きょろきょろと物色している様子の木田。

「ねえ、木田。まさかと思うけど、吸える物とか探してる？」わたしは聞いた。

「ん？ まあね。その気になりさえすれば、何だって喫煙できるのさ。わざわざ、高い市販品など買うこともないんだ」

街路樹の幹に、さっそく何かを見つけ、ひょいっとつまんでくわえる。

「あっ、虫だよ、それっ」わたしはギョッとして、2、3歩ばかり、距離を開けた。

木田は構わず、ライターで虫のお尻に火を灯す。

「ぷはあっ。無くてナナフシ、とはよく言ったもんだよね。どうだい、この匂い。マイルドだろお〜？」

どこがマイルドだか。10年も替えたことのない畳を焦がしたような臭いが辺りに漂う。

「どうせなら、もっと清々しい香りがする物を吸ったら？」わたしは手で煙を払いながら言った。

「そうかい？ たとえば、どんな？」

「うーん」何かないかな、とわたしは考える。その時、ふと雑貨店に目が止まった。「蚊取り線香とかいいかも。蚊も寄りつかないし、くるくる巻いていて、おしゃれでしょ？ それにほら、日本の夏って感じがするじゃん」

おおっ、と木田は手を打つ。

「いいな、それ。ちょっと待っててくれよ、そこで買ってくるっ」

しばらくすると、蚊取り線香をくゆらせながら、木田が店から出てきた。

「さっそく、味わってるね」わたしは言った。

「うん、婆さんに火までつけてもらったさ」口ばかりか、鼻や耳の穴からも煙が漏れている。

何かに似ているなあ、とわたしは記憶をたぐった。子供の頃に見たつきり、ずっと忘れていた懐かしいアレ。

「ああっ！」思わず、道の真ん中で立ち止まってしまう。

「どうしたんだい、むうにい」木田が振り返った。蚊取り線香から、煙がツー……っと昇っていく。

「ほら、あれにそっくり。蚊取りブタ！」

薬局のバイト

遠い親戚の従兄弟の友だちの知り合いに頼まれて、しばらく店の手伝いをするようになった。なんと、薬局である。

「でも、薬剤師の資格持ってませんよ」最初、わたしは断った。
「なに、ほんとに手伝い程度なんだ。言うなれば『販売助手』といったところかな」
それなら、と引き受ける。

レジには、90歳位のおじいさんが入っていた。薬剤師兼販売員である。わたしはその隣に並んで座った。

ほどなく、女子高生がやって来て、わたし達に尋ねる。
「あのう、ドライアイに効く目薬って、どれですか？」
「んあっ？」とおじいさん。どうやら、相当に耳が遠いらしい。
「ドライアイにいつ、効くうっ、め・ぐ・す・り！ ですっ」女子高生は、おじいさんの耳に直接手を当てて怒鳴った。

「ああ、はいはいはい。ドライアイですねえ、ありますぞ、ありますぞ。嬢ちゃん、さてはアイス・キャンディでも作りなされるか」
わたしと女子高生は顔を見合わせる。これではらちがあかない。

女子高生はふと思いついたように、通学鞆をごそごそと探り、ノートを取り出した。
ああ、なるほど。筆談か。

〔ドライアイに効く薬はありますか？〕

「いやいや、違うでしょ、それ」わたしは、シャーペンとノートを受け取って、訂正をする。

〔ドライアイに効く目薬はどれですか？〕

薬剤師のおじいさんは、ようやくと理解し、
「おお、目薬のことでしたか、いや、すまない、すまない」そう言って、棚から「ドライアイ用の目薬」を下ろした。耳が遠いだけで、もうろくはしていないようだ。

「あたし、さっそく目薬を注していく」と女子高生。「せっかくだから、今日、現国で習った『二階から目薬』っていうのをやってみようと思うんだ。ねね、店員さん、協力してくれるよねっ？」
さっそく、おいでなすった。これが「販売助手」とやらの仕事だな、とわたしはピンと来た。
「はい、わかりました。じゃあ、外に出て、軒下に立って見上げてください」わたしは言い、目薬を持って、大急ぎで2階へと上がる。

2階のベランダに立って見下ろすと、女子高生が両目をアッカンペーして突っ立っていた。
「いいですかあー、垂らしますよおーっ」わたしは呼び掛ける。
「いいよお〜っ」女子高生が返事をする。
見開いた目をよーく狙って、わたしは目薬を数滴落とす。「はあい、2階から目薬一っ」
目薬はうまい具合に女子高生の目に命中した。
「し、しみるう〜っ」黄色い声が響く。

レジに戻ると、次の客が来ていた。パーマを掛けた主婦だ。
「あのさあ、あたし、頭の後ろんところに腫れ物ができちゃってね。痛くはないのよ、痛くはね。ただ、時々、無性に痒くってさあ。うちの亭主なんて、『サロンパスでも貼っとけ。そのうち治るだろ』、なんて言うのよ。でね、このままじゃ貼れないでしょ？ で、なんだっけ、『毛刈りの窓』っていうの？
「ちゃっちゃっ、と腫れ物の周りを剃っちゃってもらえないかしら」
「わかりました、お任せください」安全カミソリとシェービングローションを取ってくると、パーマをかき分けるようにして、ジョリジョリと剃り始めた。

「どう？ きれいな四角に剃ってくれたあ？」主婦が聞いてくる。
「ええ、バッチリです。それじゃ、サロンパスを貼りますからね」サロンパスは、寸分違わず、「毛刈りの窓」に収まった。
お会計は、「サロンパス」と「シェービングローション」の2点だ。剃り賃はサービスにしておこう。

レジの前には列ができていた。
「お客様の入りがすごいですね」わたしはおじいさんに声を掛けた。
「ああん？ 核酸入りエキスはどこかって？ そうさなあ、どこだったっけかのう」
今日は残業になるかもしれないな。

浜辺の庵

浜辺に、高床式の小屋を見つける。
「こんなうち、博物館でしか見たことがないぞ」どんな人が住んでいるのか興味が湧き、ちょっと訪ねてみることにした。

枝を素朴に組んだだけの梯子を登り、入り口のムシロをまくる。
「ごめんくださいーい」
中はほどよい狭さで、囲炉裏には炭が赤く熾っていた。海に面した窓の近くでは、みすぼらしいなりをした老人が、1人イーゼルに向かっている。
「あの一……」わたしはもう一度声を掛ける。
老人はようやく気がつき、のんびりと顔を向けた。
「おお、客人など、とんと久しい」

老人は炉端へとわたしを招く。
「浜辺を散策していたら、趣のある庵を見つけまして、ご迷惑かと思いましたが、こうしてお邪魔に上がりました」囲炉裏を挟んで、老人にあいさつをした。敷いている、い草が、なんとも心地よい。
「わしのぼろ小屋を庵と呼んでくれるか。このぬらりひょん、まこと喜びを禁じえぬわい」
「えっ、あなたはぬらりひょんなのですか。あの妖怪のっ?!」わたしは驚いた。
古くから人の生活に溶け込み、ぬらりと現れては、ひょんとかわす、つかみ所のないもののけだ。

ぬらりひょんはキセルの灰をとんとと炉に落とし、懐かしむように天井を仰いだ。
「さよう、たしかにぬらりひょんじゃ。ぬらりひょんではあるが、妖怪家業は、もうとっくの昔にやめにしたのよ。今はこうして、毎朝、毎昼、毎晩と海を眺め、絵を嗜んでおる」
「妖怪って、家業だったんですか。ちっとも知りませんでした。それにしても、なぜやめてしまわれたんですか？」
「1つには、もう妖怪を信ずる者がほとんどおらなくなったからじゃな。忘れ去られる身というものは、中々につらいもんじゃて」

「わかる気がします」わたしはうなずいた。
「たまぁにわしを知る者があったとしても、『ぬらひよろりん』だの、『ぬらりんひょっ』なぞと、びみよ～な言い間違いをするんじゃな。あれは、いい気がせんもんじゃぞ」
確かにその通りだ。わたしだって、「むうにい」というところを、「むうにゃん」なんて呼ばれたくない。

四隅には、これまでに描いた海の絵が何枚も並べられていた。朝だったり、昼下がりにだったり、時間こそまちまちだが、どれも同じ構図である。
すべて、窓から見える風景のようだ。
「同じ絵ばかりを描いてらっしゃるんですね」わたしは言った。
「うむ。あの水平線にな、いつか大きな帆船が通る。わしは、その日をずっと待っておるんじゃ」
「その船はいつ来るんですか？」
「さあなあ、わしにもわからん。かれこれ137年と3月ばかり焦がれておるのだが……」ぬらりひょんは目をつぶって、かすかにうつつむく。

その船はどこから来て、どこへ向かうのだろう。誰が乗り合わせ、何の目的を持って旅を続けるのか。
わたしもまぶたを閉じてみた。来る日の情景が、鮮やかに浮かび上がる。
きっと、ぬらりひょんはその船に乗るだろう。わたしには、それがうらやましく思えた。
同乗させてもらえませんか、と聞いたとしよう。

けれど、ぬらり、ひょん、とはぐらかされてしまうのだろうか。
わたしにはわかっていた。

週刊 夢の窓 No.12

<http://p.booklog.jp/book/87796>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87796>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87796>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ